

高校入試問題を考える

—古い話になりますが、昨年の新聞報道で県立高校の入試が2011年度から大幅に内容変更されるとありました。現状の高校入試はどうか、そしてそれがどのように変わるのかということをお話いただきたいと思います。

また、ずいぶん前のことですが、わが子が中学校に入学した時、初めての保護者会で担任の先生から「公立高校を受験するのなら学校の授業だけで十分だが、私立高校受験を考えているのなら学校の勉強だけでは駄目だから塾へ行ってください」と言われて驚いた経験があります。中学校に入った途端に高校入試へ向けての学校生活が始まるのかと衝撃を受けました。中学校時代はゴールが高校入試ではないはず。中学時代に身につけるべきものとは何か、どのような中学校生活をおくったらよいのか、そのあたりのお話もぜひお聞かせ下さい。

【高橋成悟さんのお話】

入学した時から高校入試の話をするというのは、私が在職してきた学校ではあまり聞いたことがありませんけれど。教師集団によってずいぶん違うと思います。

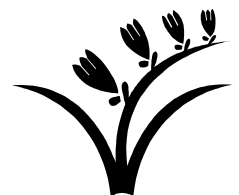
Q) 1年生の時から実力テストというのをやりますよね？

そうですね。1年と2年で1回ずつ。3年になると高校入試のための判断資料として何回かやります。今は到達度テストと名前を変えてやっていますね。保護者の中にも「子どもの成績がどのくらいの位置にあるのか知りたい」と考える人は多いですね。位置を知りたいのなら、偏差値がなくては意味がない。

Q) 親は順位を知りたいと思っても、その数字が示されてしまうと、またその数字に縛られ不安を抱いてしまう。

学力を相対的な比較の中で認識しようとするれば当然そうなる。一方で通知表は相対評価をやめて絶対評価にする、なおかつ観点別が大事、意欲・関心・態度が大事だと言う。それなのに、保護者の不安に対して、「通知表だって変わっているのだし、順位を出したってしょうがないんですよ」と説得する立場に立てない。実際、教師の頭の中もあまり変わっていないから、矛盾したことを同時並行してやってしまう。

子どもたちの今時点の学力を一定程度反映するためのテストを自分が作っているという自信を教師が持つべきだと思う。その自信が持てないのだろうか。



中学時代にどういう力をつけさせたいか

今回の政権交代で、自分たちの力、自分たちの行動で政治を変えられるという体験をしたという評論家もいます。何で今頃大人たちがそんなことを言っているのだろう？ 中学時代の生徒会活動というのはまさにそういうもの。自分たちが学校生活をどう作っていくのかということ自分の意見や一票で変えていく、作っていくという体験を重ねていく場。それは主権者をつくるということだし、子どもたちの全面的な発達を促していくこと。中学校の生徒会活動が果たしてそういう活動になっているのだろうか。委員会も仕事をするという感じになってしまっている。自分たちの中学校生活をどう変えていくのかという話し合いをするという組織としての位置づけで、皆がそういう活動をしていく。教師もそういう指導をしていくことによって、子どもたちが主権者として育っていく。そういう意味では中学校時代は一番おもしろい。部活動はそういう意味でとても大事。子どもたちの興味・関心は一番あるわけだから、そこでそういう力をつけていくことが大事なんだけど、なかなかそうはならない。



Q) 部活動の中でそういう力をつけていくというのは具体的にどういう活動をするによってですか。

一番簡単なことは、練習をどういうふうに作っていくかということ顧問の専門家の意見を聞きながら自分たちで考えていくというとりくみ。自分たちで練習計画を立てるとか。部活の生徒の中で会計係を決めて(実際の現金の管理は先生がしますが)、どうやってお金を使うのか、使った後の領収書の整理や会計簿の記録をさせて、年度が終わった後には生徒会の会計担当にきちんと点検させる。一つ一つのことが大事。お金を自分たちが握っているのだという発想を作らなくてはならない。でもこういうことをやるのは大変。先生がやってしまったほうが楽なんです。学校の代表と言って、部活の選手たちの壮行会をしますが、学校の代表なら皆から選ばれていなければならない。実際は皆から選ばれていないでしょう。ちゃんとやっている先生は、選手の選抜についても子どもたちと話し合っています。部活が生徒会組織の中でどういう位置づけになっているのかということもきちんと生徒にわからせるという指導も大切です。部活の予算は生徒会費から出されているのですから。もちろんそれだけでは足りなくて持ち出しはありますが。

中学時代は、主権者を育てるための自主活動が大事

行事の精選ということが盛んに言われていた時に、文化祭を廃止するという話が出てきて職員会議で決まってしまう。その時に生徒会顧問の先生が、「生徒総会で文化祭をやるということを提案するつもりで、今 執行部は話し合いをしています。どうするんですか」と言いました。先生たちは根が真面目ですから、「そんなの関係ない。教師が決めたんだから」とは誰も言えません。それでみんな困っているので、私は「生徒会は生徒の意思を決めるのだから、生徒会は文化祭をやるという方向で意思決定をすればいいのではないですか」と言いました。そうしたら「職員会議の決定と生徒総会の決定が違ったら、どうなるんですか」

と困惑するんです。そんなことはいくらだってあるでしょう。その時は、子どもの決め方を見て、いい加減な気持ちで決めているのなら先生たちの決定を押し通すこともあるかもしれない。子どもの決めたことが全部そのまま通るということではない。でも、子どもたちの話し合いを見て、筋の通ったことで決めているとなれば、それを受けて先生方がまた話し合いをすればいいのではないかと言いました。結果的に、生徒たちの話し合いの真剣さを先生方は感じて、文化祭を廃止するという職員会議の決定をくつがえして、文化祭をやることになりました。こういう体験はとても重要です。教師の指導によって、子どもたちが筋の通った意見を出し、きちっとした行動を取れば変えられるのだという体験は、主権者を育てる。

もう一つ、学校の裏門を開けるかどうかということや自転車通学を認めるかどうかということが生徒総会で出てきたことがあります。生徒たちは盛んに議論した結果、自転車通学を認めるということは一票差で否決されました。生徒たちに議論をさせるということは、場合によっては受け入れるし、受け入れない場合はその理由をきちっと説明しなければならない。

子どもに話し合いをさせない人の不安というのは、「変なこと決められたら困っちゃう」というもの。変なこと決めたら認めないと言えればいいんです。認めないという方が筋が通っていけば、そんなことで子どもたちは荒れたりしません。筋が通っていないから子どもは荒れるんです。

とにかく中学時代は、主権者を育てるための自主活動が本当に大事だと思います。



高校入試制度について

現実にあわせて、つじつまを合わせて、県立高校の入試制度を変えてきた

来年度に公立高校の入試制度が変わるということだが、それ以前に今、入試日がどんどん早くなってきています。今日は、茨城県の私立高校の一般入試が行なわれています。昔は2月になってからだったんですが、今は2月に入試はほとんど終わってしまっています。教師の入試のための事務作業もそれに合わせて早くなってきていて、12月前から忙しくなってきます。3年の担任は冬休み中も学校へ来ていますね。

県立高校入試に特色化選抜というのがありますが、今特色化選抜を受けない子はいません。ほとんど全員受けています。全員が特色化選抜と学力試験による選抜の2回を受けています。私立についても同じ。私立高校を受ける子は全員が推薦入試から受けています。ほとんどの私立高校に推薦入試制度がありますし、それも非常に複雑になってきています。推薦自体が10種類もあつたりする。教師もよくわからない。だからそのことで非常に

2011年度の県立高校入試は…

自己推薦である特色化選抜を「前期選抜」、学力検査での選抜を「後期選抜」と名称を変更。

前期選抜

- ①日程 2月15日・16日
- ②募集定員を増やす。(普通科は募集定員の30~60%)
- ③各校独自の試験のほかに5教科の学力検査(県統一問題)を実施する。

後期選抜

- ①日程 3月2日
- ②試験内容は40分の学力検査と面接などとし、試験日程は現行の2日間から1日のみにする。

忙しくなりました、気持ちの上で。複雑すぎて、漏らしたらいけないと思うし、子どもたちが受験する高校が 60 校もあるし。

そういう意味で、来年度から変えられる県立高校の入試制度は単純化されているとは思。改善ではなく、現状に合わせて多少手間を省く程度の改定。質として改善されたわけではない。

県立高校入試に推薦制度が入った時に、「学力だけではなく、人物を見てくれる」と賛成した人がいると思うけれど、とんでもない誤解です。いい子だから入れてくれるわけではない。目に見える、部活動で何位になったという実績や、英検何級だとかということを入れていわけで、寝たきりのおばあちゃんを毎日世話しているなんていうことは推薦に値しないのです。その推薦制が特色化選抜と名前を変えて、そうした親たちの誤解を招かなくなりましたよね。今、問題になっているのは、勉強する必要が全くないと思っている子がいっぱいいるということ。部活さえいい成績取れば高校は入れるからと。それで中学校はみんな困っている。だから今度はそれをやめて、前期・後期ともに学力試験をすることにした。そうやって、現実にあわせて、つじつまを合わせて、県立高校の入試制度を変えてきた。

かわいそうなのは、普通科で定員の 30~60%を前期選抜でとるのだが、ほとんど全員が受けるのだから、絶対落ちる子が出る。後期だけ受けますというのは心配だから前期も受けるんです。多くの子どもに不合格の体験をさせるということになる。そんなことに何の意味があるのかと思います。

Q) 県立高校の入試日程が 10 日前後遅くなっても、私立高校の入試日程が全体的に早まっているというのが変わらなければ、状況はあまり変わらないのでは？

昨日のあるクラスの授業では、出願に 5 人行っていて、欠席が 2 人いて、全部で 7 人欠席。授業をどんどん先へ進めてもいいのかどうかと思う。授業の組み立てが難しい。個人的な意見では、入試は卒業式の後にやってほしいとさえ思う。今までだって 3 年生は 3 月に教科の授業をしていない。入試が終わったら授業にならないというのでは、ちょっとプロの教師としてどうかなと思うが、現実的にはそううまくはいかない。



**高校が偏差値で分けているというのは、能力別に入れているということ
みんな同じレベルだと工夫も要らず、授業に厚みがなくなってしまう**

Q) 松P研は以前から、高校全入を求めて活動してきました。現在高校への進学率はほぼ 100%に近いのだから、小・中学校と同じように、希望する子どもは全員高校へ進学できるようにしてほしい。学区も小学区制にして、地元の高校へ皆が進むというようにしてほしい。今は、学区も広く、受験できる公立高校がたくさんあって、一つの中学から 60 もの高校へ子どもたちが別れて進学していくという状況。

松戸市内の中学校から受験できる公立高校は 80 くらいある。でも、実際はあまり遠くの学区の高校は受験しなくなりました。不況の影響でしょう。遠いと交通費がかかりますから。私立についても同じです。東京の私立高校を受ける子も少なくなりました。

高校全入や、小学区制ということについて私も同じように考えますが、実際みんながそうになっていくかどうかはなかなか簡単なことではないと思います。学区が小さければ一つの高校にできる子からできない子まで、いろいろな子どもたちが集まってくる。それをやりづらいついというのか、そこに授業の工夫が生まれるのかという問題。

今、小・中学校で少人数授業をしていますが、政策的に導入され始めた時はほとんどが能力別に分けていました。ところが、やはり駄目なんです。アトランダムに分けた方が絶対いいとなってきました。みんな同じレベルだと工夫も要らず、授業に厚みがなくなってしまう。オヤツという疑問が出ない。

高校が偏差値で分けているというのは、能力別に入れているということ。

高校に行きたくない子も確かにいる。でも、今の体制は途中から入るといって道が基本的にない。高校に行かない子どもたちへの社会の目は冷たい。そういう冷たい目がなければ、最初から高校受験しなかった子もいるのではないかと思う。できなければ留年させればいいと思うけれど、留年した人は学校を辞めてしまう。そこに矛盾があって、学校のシステムだけでは解決できない。



Q) 多様な子どもたちに多様な進路をとということで、県立高校も単位制高校などを作ってきました（その中で統廃合もしてきましたが）。高校がそのように多様な形でいいのか、あるいは皆同じ形で、後で学び直せるように年齢制限をなくしたほうがいいのか。

同じ公教育として公立も私立も同じ学費に

今の3部制の定時制高校で助かる子がいるのなら、それでいいんだろうなとも思います。でも、3部制でなければ助からないような学校をそのままにしておいて、一方で3部制をつくるのは違うのではないかとも思います。理想の問題と、今直前の問題をどうするかということと両方ある。

——基本的なところを変えていくという姿勢がないまま、ちょこちょこつまみ食いする感じで教育行政をやってきているから、迷路に入っているような気がする。

公立高校の制度の改変などはまさにそのとおりですね。学力試験だけだと成績偏重でおかしいのではないかとわれれば推薦制を導入し、推薦制は人物を見てくれるのだと思ったら、実はそんなものは測りようがない。それを繕うために特色化選抜に変える。そして特色化選抜の弊害が出てくると、今度は前期と後期に分けるというようにした。これがうまくいかなければ、また変えようとするのでしょね。

——この不景気の中、公立高校を希望する子が増えているのでしょね。

そうですね。公立高校を希望するというより、公立高校しか受けないという子がとても増えています。

——子どもの数が減っているのなら、募集定員をそのままにしていればそのうちみんな入れるようになるのかと思っていたら、そうではないのですね。公私比率というのがあると聞きました。

——市立松戸高校は、松戸市に住む子どもたちの受け皿になっていたはずなのに、平成 11 年に作った国際人文科は松戸市以外の生徒も入れるようにしました。市内に住んでいる子どもが近くの高校へ進みたいと思っても、なかなか入りづらい状況になっている。

公立高校と私立高校の募集定員の比率を最初から決めてしまうことには問題がありますが、私立高校の存在意義というのがあります。今は、私立だからお金出してあたりまえと思っていますが、同じ公教育として公立も私立も同じ学費でいける必要があると思います。今回の高校の授業料無償化という政策は公立と私立の差をより広げてしまうのではないのでしょうか。

——公私比率があると聞いて気になったのは、公立高校を希望しても学力的に入れなくて私立高校へ行く子どもは経済的な負担が大きいということ。

どこの学校へ行っても「そこが一番」と思えるような子どもを育てたいと思います。「こんなところへ来ちゃった」という気持ちで 3 年間過ごしてほしくない。

今、就職は厳しいですね。うちの中学校でも家庭の経済的理由で就職希望の生徒がいたのですが、結局見つからなくて、仕方がないから高校進学する道を選びました。授業料の減免などの制度を県があまり宣伝しないですね。松戸市では就学援助の説明を学校を通して行っていて、県の中では進んでいる方です。学校でも市役所でも、ずっと手続きできるのが一番望ましいですね。

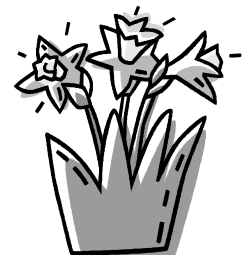
最近内申点の学校平均値を出すということをやっていますね。それで全県の平均値を出す。例えばある学校の内申点の平均値が 95 で、全県の平均値が 94 だとすると、その中学校の 3 年生全員からその差の 1 点を引いて、それを内申点とする。逆に全県の平均値より低い場合は、その差を加えます。平均値が高い学校は成績のつけ方が甘いのだろうという考え方ですよ。絶対評価といいながら、いい加減なんです。相対評価というのは非教育的だが順位を表すということでは正確なんです。

でも、こういう点数操作をすることが公平になると発想自体がおかしい。でも気持ちはわからないでもない。何をやってもどこかに矛盾はある。

去年、どこの高校にも行かれない子が出てしまったので、今年募集定員を 30 余学級以上増やしました。教職員組合でも最後までぎりぎりのとこ

毎年、「千葉県公立私立高等学校協議会」で、公立高校と私立高校の募集定員を決定しているそうです。2010 年度の募集定員も昨年 7 月に開かれた協議会で決定されました。その結果、2010 年 3 月中卒者数を 56,020 人、うち進学者数を 54,844 人と推計し、公立高校募集定員は、34,720 人、私立高校募集定員は、16,676 人と決めました。

公立高校の募集定員の比率は、年々減少しており、1989 年には 72.8%だった割合が、2010 年には 63.3%になっています。



ろで、県教委に対し2次募集の定員を増やすように要望書を提出しました。記者会見して進路指導担当をしている組合員や保護者が実態を話しましたが、募集定員を増やすところまで行きませんでした。生徒の数を見て学級数を決めるのですが、今年は予定以上に増やしています。やはり声を上げていかなければそれも叶わなかったのではないかと思います。黙ってないでよかったと思います。去年の子どもたちはかわいそうでしたが。

来春（22年度）の中学校卒業予定者が今年度よりも2450人の増となる見込み。このため平成22年度の公立高校の募集定員を見直し、県立高校では1720人増の32,360人とし、学級数も43学級増の809学級とするそうです。